

「ゆゆし」の意味・用法

— 中古・中世の文学作品を対象に —

三野谷 有 衣

はじめに

古語「ゆゆし」は、『角川古語大辞典 第五巻』によると「①不吉であるさま、②いとわしく思うさま」というマイナスの意味、「③すばらしい」というプラスの意味をもつ語である。また、「④良い意味でも悪い意味でも程度がはなはだしいさま」をいい、プラス・マイナス両方の意味も表す。古語「ゆゆし」は、正反対の事柄を表す両義性のある語である。多義性のある語は多く存在するが、正反対の意味をもつ「ゆゆし」のような語は少なく、非常に興味をもった。しかし、現代語「ゆゆしい」にはマイナスイメージだけが残っている。このように、時代によって使われ方や意味に何か特徴や傾向があったのではないかとと思われるため、中古・中世の文学作品を対象に分析を行い、各時代における古語「ゆゆし」の意味・用法の特徴を明らかにする。

1. 先行研究と研究の方法

1. 1 先行研究

形容詞の意味・用法の通時的な変化に関する先行研究は少なく、「ゆゆし」を取り上げた研究もほとんど行われていない。形容詞を扱った、陳崗・吉田則夫（2007）では、心情形容詞「ねたし」について研究を行い、「上代、中古から中世における日本古典文学作品に使用された「ねたし」及びその関連語の用法を抽出し、その意味的特徴を明らかにし、また歴史的な意味変化の実態を明らかに」している。本稿では、陳・吉田（2007）の分析方法や時代ごとに分析をまとめる論文構成を参考にする。

中川正美・麻生恵子（2002）は、『狭衣物語』の「ゆゆし」を取り上げ、「主人公の狭衣を対象とする『ゆゆし』は、その人格形成において重要であると思う。というのは、『ゆゆし』は本来忌むべき想いを表現する語なのだが、文脈のなかでは、『ゆゆしきまでおぼす』と、一般の認識、範疇からすれば美しすぎるものに対する賞賛として用いられていることが多いからである。こうした、『ゆゆし』の両義性にもっと注目すべきではなからうか」と指摘している。中川・麻生（2002）では、「狭衣大将に用いられている『ゆゆし』は、他の人物のそれとは明らかに質的な相違がある」とし、「①狭衣大将が本来持つ素晴らしい姿・形・才能に対して」「②狭衣大将が発する言葉や行動に対して」の二種の用法に注目して分析を行っている。本稿では「ゆゆし」の両義性に視点を置いた分析、「ゆゆし」の分析方法を参考とする。

池田敬子（1996）は、『平家物語』諸本に理想人として描かれる重盛が、覚一本において「ゆゆしく大様なる人」と描写されることを取り上げ、「ゆゆし」を用いることによる物語に与える影響について研究を行っている。その中で行われている「ゆゆし」の意味分類を参考にする。

大野晋 (1966) では、「ゆゆし (ゆゆしい)」の古代から現代までの意味変化が記述されている。その中で、「これ (『ゆゆし』) はポリネシア語で使われるタブーという言葉と同じ意味を表すものと思われる。タブーとは2つのことを指している」と述べ、「『タブー』とは、神聖なという意味と、呪われたという意味との二つの意味」であると指摘している。「ゆゆし」の本来もつ意味、時代による意味変化を参考に、本稿では中古・中世に限定した「ゆゆし」の意味、中古から中世にかけての意味変化について分析を行う。

藍美喜子 (1988) では、「あはれ」の分析の際に『いと、あわれ』のように強調表現を伴う例が多く見られ、計268例がこのような上接語をもち、強いインパクトを与えていることも特色として付け加えておきたい」と述べている。「ゆゆし」の用例を見てみると、「あはれ」と同様に強調表現を伴う例が多く見られることから、本稿においても「ゆゆし」に伴う強調表現について分析を行い、藍 (1988) の強調表現に関する分析を参考にする。

1. 2 研究の対象・方法

1. 2. 1 研究の対象

中古・中世の文学作品から形容詞「ゆゆし」の用例を取り出し分析を行う。抽出する「ゆゆし」は、「忌々し」「優々敷」等の漢字表記も含む。文学作品の内容 (状況・背景) により、「ゆゆし」の使用率が異なることが考えられるため、偏りがないように作品選択に配慮した。以下に、作品名、用例数を挙げる。

作品名 (用例数)	【中古作品】 (9作品 315例) 大和物語 (4例)、蜻蛉日記 (16例)、宇津保物語 (31例)、枕草子 (9例)、源氏物語 (101例)、紫式部日記 (6例)、栄花物語 (96例)、更級日記 (3例)、狭衣物語 (49例)
	【中世作品】 (10作品 109例) 保元物語 (7例)、平家物語 (19例)、宇治拾遺物語 (18例)、十訓抄 (18例)、沙石集 (10例)、徒然草 (6例)、曾我物語 (4例)、増鏡 (18例)、義経記 (5例)、御伽草子 (4例)

1. 2. 2 研究の方法

本稿では、「ゆゆし」の意味・用法に関して扱うため、「ゆゆし」について考察を進める際に、参考となる辞書として『角川古語大辞典 第五巻』(角川書店)を用いる。今回は、辞書の記述は省略した。

辞書の記述から、「ゆゆし」は多くの意味をもつ語であることが分かった。古語辞典の分類はやや細かいため、本稿では、分かりやすく分類された池田 (1996) に従いたい。

以下に、池田（1996）の「ゆゆし」の意味分類を示す。

- ①聖なものに対して、侵してはならない、触れるべからざるものと感じて抱く感情。
おそれおい・慎まれる・はばかれる
- ②①の語義から転じて、不吉である・いまわしい
- ③(善悪にかかわらず) 程度が甚しい様。大変な・ものすごい・非常な
- ④③で表現されることの内、特に良いことに関しての讃辞として、非常に立派な・すばらしい・格別である

この分類を参考に、四つに分類し、分析を行っていくこととする。本稿における意味分類は、次に示す通りである。

- | | |
|--------------|------------|
| ①おそれおい | ③程度が甚だしいさま |
| ②不吉である・いまわしい | ④すばらしい |

分析に関しては、対象、共起する語句、涙の三つの観点から見ていく。対象については、「ゆゆし」とされる対象となるものを、文章中から抜き出し、〈1〉人（人の姿・様子・行為など人が関わっていること）、〈2〉物、〈3〉状況の三つに分類する。そして、その分類した項目ごとに、より詳細に分類、整理し、それぞれにおける意味・用法の特徴を見ていく。なお、意味分類ごとに分析を行うが、〈③程度が甚だしいさま〉の意味においては、〈1〉良い方向に程度が高められるもの、〈2〉悪い方向に程度が高められるものの二つに分類し、その後の作業は他と同様に行う。

共起する語句に関しては、二つの観点について見ていく。一点目は、藍（1988）を参考に「いと・いとど」「うたて」など強調表現に注目し、用例から抜き出し、意味分類ごとに整理する。抽出した強調表現と「ゆゆし」の関係性、また強調表現を伴うことで、意味や印象にどのような変化を与えているのか、意味に違いがあるのか等を見ていく。二点目は、「ゆゆし」と共に使われている「あさまし」「心憂し」などの形容詞・形容動詞を抜き出し、それらの形容詞・形容動詞の意味・特徴から「ゆゆし」との関係进行分析する。

4. 「ゆゆし」の意味・用法では、それぞれの時代における対象の調査から、「涙・泣く姿」に関するものに注目し、具体的に「涙・泣く姿」を整理し、「ゆゆし」と表される涙に対して当時どのように考えられ、涙に「ゆゆし」が使用されていたのか分析を行う。

今回は、中古・中世それぞれにおける「ゆゆし」の意味分布と中古から中世にかけての意味変化、対象における〈③程度が甚だしいさま〉の分析に関して、取り上げる。

2. 中古の文学作品における「ゆゆし」

2. 1 「ゆゆし」の意味分布

池田（1996）の意味分類を用いて、用例を四つに分類する。四つの分類は次に示す

(4)

通りである。【①おそれおおい、②不吉である・いまわしい、③程度が甚だしいさま、④すばらしい】以下、作品ごとの意味分布を挙げる。

作 品 名	①	②	③	④	総 数
大和物語	0	4	0	0	4
蜻蛉日記	0	12	0	4	16
宇津保物語	0	23	8 (2)	0	31
枕草子	0	6	2	1	9
源氏物語	0	75	26 (21)	0	101
紫式部日記	0	6	0	0	6
栄花物語	1	70	24 (9)	1	96
更級日記	0	3	0	0	3
狭衣物語	0	31	17 (11)	1	49
合 計	1	230	77 (43)	7	315

※③の（ ）は②の意味をもちかつ程度を表しているものの数。

上記の結果を見ると、中古の文学作品において、315例中230例（73%）が<②不吉である、いまわしい>の意味であることが分かる。用例数の少ない作品（大和物語・紫式部日記・更級日記）においては、②の意味でしか使われていない。続いて、315例中77例（24%）で<③程度が甚だしいさま>の意味が多い。このことから、②と③の意味で代表的に用いられていたといえる。

2. 2 「ゆゆし」の対象

以下、意味分類をした項目ごとに「ゆゆし」がどのような対象をとっているか、何に対して「ゆゆし」と言っているのか分析を行う。

2. 2. 1 <②不吉である、いまわしい>の意味の対象

<1> 人（姿・様子・行為）、<2> 物、<3> 状況に対象を分類した結果、<1> 人を対象にとる用例が最も多い。

三分類に共通して、「死を連想するもの」「その物自体が不吉、不吉さを連想させるもの」が、各分類中最も多く見られた。「人が亡くなったこと」「死骸」など「死そのもの」だけでなく、「喪服」「霊」「物の怪」など「死と関係の深いもの」や、俗世間からの死を意味する「出家」などの例も見られた。

2. 2. 2 <③程度が甚だしいさま>の意味の対象

以下、<③程度が甚だしいさま>の意味で使われている「ゆゆし」77例を調査対象とし、分析を行う。

程度に関することなので、この意味においては、〈1〉 良い方向に程度が高められているもの、〈2〉 悪い方向に程度が高められているものの二つに分類する。以下に、それぞれの用例数をまとめた。

良い方向に程度が高められているもの	38例 (49%)
悪い方向に程度が高められているもの	39例 (51%)

■ 良い方向に程度が高められているもの

〈1〉 良い方向に程度が高められているものに分類される38例を、さらにくわしく分類したのが以下の表である。良いことを高める場合、「程度がすごいとされるもの」と「②の意味をもちかつ程度を表すもの」(不吉な程、恐ろしい程○○)の二種類に分けられた。

程度がすごいとされるもの 8例 (22%)	高し／御儀式／御髪／あはれ／恋ひ聞えさせ給ひけれ／何事もねび行くこそ／おほし扱はせ給／琴の上達の具合
②の意味をもちかつ程度を表すもの 30例 (78%)	御ありさま(5)／うつくし(4)／犬宮の美しき／静にみざりおはするさま／うちとけたまえるさま／うるはしうしたてたてまつり給へる姿／御かたちも身の才も／御顔の薫／きよなる事／うつくしうおはする／見え給し御かたち／おかしげなる／めづらしうさし出で給へる御ありさま／うつくしう…生いまさり／ものし／白くうつくしくて／生ひなり給ふ／かたち有様など…光りまさり給ふ／いと餘りなる御顔付／苦しうて寄り居させ給へる御顔の色合、気色／今より様殊に、ろうたげなる事／例ならぬ狩装束にやつれ給ひて、いかにぞや思ひ乱れ給へる御様／御門・東宮

上記の結果を見ると、38例中30例(78%)が「②の意味をもちかつ程度を高めるもの」で、この分類においてほとんどがこの用法であるといえる。「②の意味をもちかつ程度を高めるもの」に分類される対象は、「御ありさま、○○なさま」や「うつくし」という人の姿や様子についてのみであるということが分かる。程度を表す場合においても、「ゆゆし」は人に対して使われることが多いといえる。

対象となるものは全てプラスの内容であるにも関わらず、素直に「すばらしい」という表現をせず、②の意味を用いて素晴らしさを表現するのだろうか。以下に用例を示し、説明する。(用例中「ゆゆし」に下線、対象の語に波線を付けた。以下同様とする。)

- (1) いときびはにてをはしたるを、ゆ・しううつくしと思ひきこえたまへり。(源氏物語・桐壺)
- (2) 御顔の薫めでたくけ高く、愛敬つきておはしますものから、花々と匂はせ給へり。うたてゆ・しきまで見奉り給。(栄花物語・はつはな)

- (3)世にたぐひなくゆゝしき御ありさまなれば、世に長くおはしますまじきや、と天の下の人のさはぎなり。
(源氏物語・夕顔)

(1)は、源氏がまだ本当に子ども子どもした様子が、恐ろしい程可愛らしいと思われる、という意味である。可愛らしいというプラスの内容の程度を高めるために「ゆゆし」が使われている例である。

(2)は、督の殿の御顔が美しく、気品をお持ちで、同時にはなやかで魅力的であり、余りに美しすぎて不吉に感じられる程に見える、という意味である。

(3)は、世の中に並ぶものがない恐ろしい程美しい君の姿なので、長生きは出来ないのだろうか、という意味である。このような用例について、『栄花物語全注釈』『新編古典文学全集 源氏物語』の解説によると、美しさ、可愛らしさを「不吉な程、恐ろしい程」とするのは、当時、美しさゆえに鬼神に魅入られることを畏れ、美しすぎると若死にする（美人薄命）と考えられていたため、そういったことが起こるのではないかという思いから、このように用いられたとされる。

■悪い方向に程度が高められているもの

〈2〉悪い方向に程度が高められているものに分類される39例を、さらにくわしく分類したのが以下の表である。

程度がひどいとされるもの 15例 (38%)	憎み／いといたふ衰へにけり／女君の様子／事（＝重態である）／悲しう／此の有様／御気色ども／泣かせ給へば／大将の様子（＝重態）／姫宮、若宮など皆こと方に渡し奉る／伊周と隆家が配流されること／御もののけ／事（＝又押し返し臥しまらばせ給）／廃太子の事態／常よりもいと苦しうせさせ給へ
②の意味をもちかつ程度を表すもの 13例 (33%)	泣きあへり(2)／泣きみちたり／御有様（＝すべて何事もおぼえさせ給はず、御聲をだに惜しませ給はず）／思嘆くべし／おぼし入らせ／との御前物おぼし続けさせたまひて／たちさはぎたり／思ひきこえ給／恋しう悲しくのみ思さるれば／(世になくなり給ひつらむ人のやうに) 思ひ嘆くさま／さらにおぼし入たるさま／一の御子の母女御の様子
相手が言った内容 8例 (21%)	「あへものにはけしうはあらじかし」と言われたこと(2)／物うらやみ／「まことにて書き給へるにやあらん」と言われたこと／(源氏が) 軽々しく喪中の幼女に求愛する様子／たがふということ／「宮を一番大切に思っていない」と言われたこと／直前の会話相手の話
その他 3例 (8%)	様（＝人並み以下のみすばらしい暮らし）／これ（＝11～12歳の少年が亡くなったこと）／赤子が災いの根元であると思うこと

上記のように、〈2〉悪い方向に程度が高められているものの対象を整理すると、「程度がひどいとされるもの」「②の意味をもちかつ程度を表すもの」「相手が言った内容」「その他」の四種類に分けられた。「②の意味をもちかつ程度を表すもの」に分類されるものは13例であった。これは、人の様子が対象である。特に、「おぼし入る」「思ひ嘆く」という考え込む様子が普通以上であることを表すために、「ゆゆし」が使われていると考えられる。また、「相手が言った内容」が対象であるものは、「ゆゆし」が「とんでもない、なんてこと（を言うのだ）」と訳される。話の内容が「ゆゆし」であると感ずる側にとって、予想外であり、自身が考えていた以上に悪い内容であるため「ゆゆし」が使われている。以下に、それぞれの用例を挙げる。

- (4) ただ「時々も見奉らむ事の絶えぬ事」と思ひ嘆くさま、世になくなり給ひつらむ人のやうに、あまりゆゝしきまでぞありける。(狭衣物語・巻四・下)
- (5) まして内裏の御気色に随ひて、今日明日にても世を背きなむとこそ思し召したれ。いとゆゝしき事かな。(狭衣物語・巻三・中)
- (6) 十二ばかりにぞおはしける。ただ今世の中に悲しくいみじきためしなり。……これはいとゆゝしう心憂し。(栄花物語・月の宴)
- (7) かく忌々しきさまを、見そめ給へらむ人の、なにとかおぼすべき。(宇津保物語・俊蔭)

(4)は、「帝位に就くと狭衣大将の姿を拝見する機会がほとんど無くなってしまふ」と嘆く女房達の姿が、亡くなった人に対してのようで不吉な程である、としている。これは、「②の意味をもちかつ程度を表すもの」の例である。亡き人を思い嘆いているような様子を連想させるほど、度が過ぎていることを表している。

(5)は、宮は今日明日にでも出家なさろうと思われているので、あなたがおっしゃることはとんでもないことです、という意味である。直前の相手の発言に対して、そんなことは考えられないことという意で「ゆゆし」が用いられている。

(6)は、11～12歳の少年が亡くなったことに対して、とんでもないことだとする例である。人が亡くなることは必然であるが、このような若さで亡くなることは普通には起こり得ない大変なことを意味している。

(7)は、このようにみすばらしいさま、という意味である。これは、一般的な姿よりも程度が低い（低すぎる）ことをいっており、あまり良くないことをより低める場合にも、「ゆゆし」は用いられる。

3. 中世の文学作品における「ゆゆし」

3. 1 「ゆゆし」の意味分布

2. 中古の文学作品における「ゆゆし」と同様に、池田（1996）の意味分類を用いて、用例を四つに分類する。四つの分類は次に示す通りである。【①おそれおおい、②不吉である・いまわしい、③程度が甚だしいさま、④すばらしい】以下、作品ごとの意味分布を挙げる。

作 品 名	①	②	③	④	総 数
保元物語	0	1	2	4	7
平家物語	0	0	10	9	19
宇治拾遺物語	0	5	11	2	18
十訓抄	0	1	14	3	18
沙石集	1	0	7	2	10
徒然草	0	0	2	4	6
曾我物語	0	0	3	1	4
増鏡	1	3	7	7	18
義経記	0	0	4	1	5
御伽草子	0	1	1	2	4
合 計	2	11	61	35	109

上記の結果を見ると、中世の文学作品において全109例中61例（56%）が、＜③程度が甚だしいさま＞の意味であることが分かる。中古の文学作品における意味分布で、最も多かった②の意味は、わずか11例（10%）であった。そして、④の意味においても、中古では7例のみであったのに対し、中世では35例（32%）見られた。このことから、中世においては③・④の意味が代表的に用いられていたということがいえる。

3. 2 「ゆゆし」の対象

2. 2と同様に、意味分類した項目ごとに「ゆゆし」がどのような対象をとっているか、何に対して「ゆゆし」と言っているのか分析を行う。

3. 2. 1 ＜③程度が甚だしいさま＞の意味の対象

以下、＜③程度が甚だしいさま＞の意味で使われている「ゆゆし」61例を調査対象とし、分析を行う。

2. 2. 2と同様に、＜1＞良い方向に程度が高められているもの、＜2＞悪い方向に程度が高められているものの二つに分類する。以下に、それぞれの用例数をまとめた。

良い方向に程度が高められているもの	34例（56%）
悪い方向に程度が高められているもの	27例（44%）

「ゆゆし」と対象のつながりを見ると、「ゆゆしく○○」「ゆゆしき○○」のように直接対象を修飾している例が全61例中47例であった。中古では、このようなものは少なかったので、中世の文学作品における特徴であるといえる。

■良い方向に程度が高められているもの

〈1〉良い方向に程度が高められているものに分類される34例を、さらにくわしく分類したのが以下の表である。

程度がすごいとされるもの 12例 (35%)	似給ひたり／興にてありける／御興／かぶら矢／大なるむさ さび／蛭／大事／たばかり／はやりこちたり／帰らせ給ひび き／世の中の騒ぎが大げさであること／御用
人の姿・様子 13例 (38%)	けだかけなる御声(2)／心ざしの程(2)／大様なるもの／大事 の人／矯飾ある人／きよらに／御けしき／気色／芸能もすぐ れ／きらめきてけり／前の世のゆかしき御ありさま
力 9例 (26%)	威勢がよかったこと(2)／力／人(＝たくましい)／羽振りが よかったこと／ゆづりたりし／(豪勢に)あつかひけり／器 量／分限になし

上記のように、〈1〉良い方向に程度が高められているものの対象を整理すると、「程度がすごいとされるもの」「人の姿・様子」「力」の三種類に分けられた。「人の姿・様子」が13例と一番多いと分かった。中世においては、「力」に関係する対象が見られた。これは、力強さだけでなく、勢力や権力などが甚だしく大きい力をもっていたということも含まれる。以下に、例を挙げる。

(8)この事、上まできこしめして、中々ゆ・しき興にて有けるとかや。(宇治拾遺物語)

(9)六十人がちからあらはしたるゆ・しき人をぞ出されたる。(平家物語・名虎)

(10)天の下はさながら大殿の御心のままなれば、いとゆ・しくなん。(増鏡・三神山)

(8)は、主人がかえって大層おもしろがられた、という意味であり、おもしろがる様子を高めているものである。

(9)は、六十人力のあるたくましい男を出した、という意味である。このように力が人並み外れたすごいものと表すものが2例見られた。

(10)は、天下の政治は、大殿の思うがまま、たいへんな御威勢であった、という意味である。政治的地位を高め、勢力が甚だしいことを表す例である。

■悪い方向に程度が高められているもの

〈2〉悪い方向に程度が高められているものに分類される27例を、さらにくわしく分類したのが以下の表である。

程度がひどい・大変とされるもの 19例 (70%)	大事 (5) / 御大事 / 事 / 御越度 / 忍びたる / ことごとし / ふくつき鉢 / さま / あし (悪し) / 心をくれの人 / 泣きあへり / 禁中全体が諒暗中で厳肅に喪服中であること / 信起したり / 災 / たけき
とんでもないと非難されるもの 8例 (30%)	罪 (2) / 謬ち / 恥 / 額に陀羅尼をこめたこと / 牢屋に七度も入ること / 一人娘を生きながらに切り刻まれる姿を見ること / 不孝

上記のように、〈2〉悪い方向に程度が高められているものの対象を整理すると、「程度がひどい・大変とされるもの」「とんでもないと非難されるもの」の二種類に分けられた。「程度がひどい・大変とされるもの」が19例と多い。「大事」「御大事」「事」を合わせると7例見られ、出来事やその場の様子が甚だしいさまが対象に取られていることが分かる。

また、「とんでもないと非難されるもの」に分類される中で、「罪」「謬ち」「恥」などが見られる。以下に、用例を挙げる。

(11) 沙汰せられきこの所領をかくあまたに分を面々に安堵申、宮仕はれんことゆゑしき大事也。
(沙石集)

(12) 志を哀みて教給事はうれしいけれとも、聖の御ためあしき名や立給はんすらん。もし然ば、ゆゑしき罪にて有なんかし。
(十訓抄)

(11)は、領地をこのように大勢で分けて、各々が安堵（將軍家に土地の所有について承認してもらうようお願いすること）しに行くこと＝大事で、これは非常に大変なことであるという意味である。

(12)は、一生懸命教えて下さることは嬉しいが、万が一御坊さまの身に悪い噂がたたないだろうか。もしそうなればとんでもない罪を犯すことになる、という意味である。

3. 2. 2 <④すばらしい>の意味の対象

対象を整理すると、〈1〉人（姿・様子・行為）を対象とするものが最も多い。〈1〉人を対象にとるものの中でも「人物」そのものを対象とする場合が12例（57%）と多く、具体的な人物名を指しているものも多数見られた。「すばらしい」「立派である」という意味で「ゆゆし」が用いられる場合には、他の意味に比べて何が「すばらしい」のかより具体的に表していると考えられる。

4. 「ゆゆし」の意味・用法

ここでは、2. 中古における文学作品の「ゆゆし」と3. 中世における文学作品の「ゆゆし」の分析結果をもとに比較を行い、「ゆゆし」の意味・用法をまとめる。

4. 1 意味分布の比較

本稿の2. 1にみるように、中古の文学作品において<②不吉である、いまわしい>の意味の用例が230例(73%)で最も多く、次いで<③程度が甚だしいさま>の意味の用例が77例(24%)であった。<①おそれおおい>の意味の用例はわずか1例のみであり、<④すばらしい>の意味も7例とわずかしは見られなかった。

中世の文学作品においては、本稿の3. 1にみるように、<③程度が甚だしいさま>の意味の用例が61例(56%)と最も多く、次いで<④すばらしい>の意味の用例が35例(32%)であった。<①おそれおおい>の意味の用例はわずか2例であった。中古の文学作品における意味分布で最も多かった<②不吉である、いまわしい>の意味の用例は、わずか11例(10%)しか見られなかった。

このことから、中古では②と③の意味で代表的に用いられており、中世にかけて②の意味が段々と減少していき、③と④の意味で代表的に用いられるようになったといえる。

大野(1966)では、「ゆゆし」の意味について「神聖だから触れてはならないとする場合と、汚れていて不吉だ、縁起が悪いから触れてはならないとする場合の二つ」があり、「奈良時代ではこのように使われていたが、平安時代になると、よい場合にも悪い場合にも、はなはだしいということを表わした」と述べている。平安時代においては「非常な美しさをいい、かえって何かそこに魔がさすのではないかという恐れを、人々に感じさせた」という例や、「自分の子供が死んだので、自分の身は人が触れてはならない汚れた身である、という場合にも『ゆゆしき身』と言っている。このように、非常だという場合に『ゆゆしい』と使った」とある。そして、「平家物語」では「『ゆゆしい人』は、たくましい大男という意味である」とし、このように「ゆゆし」の意味が変化してきたことを述べている。上記で述べたように、本稿においても同様の傾向が見られた。『角川古語大辞典』には、「本来は禁忌の情を表し、また、禁忌に触れることによる不吉の情を表したが、中古になると、恐れや不気味の情を表す用法が一般的となり、そこからさまざまな意も生じ、しだいに禁忌の意味合いが失われた」とある。本稿において、中古から中世にかけ使われなくなってしまった意味は無いということが分かった。しかし、<①おそれおおい>の意味が極端に少ないのは、古語辞典の記述にあるように、中古以前の上代に代表的に使われていた意味で、中古になり新たな意味の出現により、少なくなっていったといえる。つまり、中古・中世の「ゆゆし」は、もともとの意味も残しながらも、意味変化を続け、中古では特に<②不吉である、いまわしい>、中世では<③程度が甚だしいさま>が代表的意味とされたと考えられる。したがって、中古ではマイナスイメージが強く、中世においてはプラスイメージが強いということがいえる。

4. 2 対象の比較

2. 2. 2及び、3. 2. 1より、中古から中世にかけて程度を高める場合において、悪い方向に高められるものから、良い方向に高められるものが多くなっていくことが分かった。これは、4. 1の意味変化より、＜②不吉である、いまわしい＞→＜③程度が甚だしいさま＞→＜④すばらしい＞と変わっていくことから、程度に関してもより良い内容についていう場合が増えていったと考えられる。

〈1〉良い方向に程度が高められている場合において、両方の時代に共通して言えることは、「人の姿・様子」を対象とするものが多いということである。中古では「御ありさま」「うつくし」など容姿の美しさを対象とする場合が30例（78%）であった。これらは全て「②の意味をもちかつ程度を表される」ものであり、何か良くないことが起こるのではと不吉さを感じさせるほど度を越えた美しさという表現である。これに対し、中世では「御けしき」という容姿についての対象もあるが、「心ざしの程」「芸能もすぐれ」など容姿だけでなく人柄についての用例も見られた。さらに、中世になり「力」「威勢の良さ」が対象として現れ、勢力や権力の甚だしさに目が向けられていったと考えられる。

〈2〉悪い方向に程度が高められている場合において、中古では、〈1〉良い方向の場合と同様に「人の姿・様子」を対象とするものが多いという結果が見られた。これらも「②の意味をもちかつ程度を表される」ものであり、「おほし入る」「思ひ嘆く」といった様子が異常な程で、そのままその人自身も何か良くない状態になってしまうのではという恐ろしさ、不吉さを込めた表現である。中世では、「大事」「御大事」「事」といった出来事やその場の状況の様子について対象としているものが多く見られた。このことから、〈2〉悪い方向に程度を高める場合に、中古では多く「人」に対して用いられていたが、中世になると人々も含めた「全体的な場の様子」に対して用いられることが多くなっていったといえる。

さらに、両方の時代共に、「とんでもない（ことだ）」とする用例が見られた。中古では「相手が言った内容」が起こり得ないことであったり、自身が考えていた以上に非常な内容であったりした場合に言われていた。それに対し、中世では、「罪」「謬ち」「牢屋に七度も入ること」など非難を受けるような内容に対して言われていた。すなわち、同じような用法で用いられていたが、「とんでもない」とする内容の程度がより高まったということがいえる。

おわりに

以上、中古と中世の文学作品をそれぞれ分析し、比較することで「ゆゆし」の意味・用法を明らかにした。意味変化において、古語辞典の記述には見られない、中古から中世にかけての意味変化が今回の分析で明らかとなった。また、意味変化に伴い、「ゆゆし」の取る対象も変化し、それぞれの時代における用法の特徴も見られた。本稿で扱った古語「ゆゆし」は、先行研究の少ない語であったが、分析を進める中で、多くの発見があり、様々な観点から「ゆゆし」という語について新たな見解を加えた。

補注

本稿の引用文は下記を使用した。

日本古典文学大系（岩波書店）

- ・『宇津保物語』一～三 ・『枕草子 紫式部日記』 ・『宇治拾遺物語』
- ・『保元物語 平治物語』 ・『義経記』 ・『御伽草子』 ・『栄花物語』上下
- ・『神皇正統記 増鏡』 ・『曾我物語』

新日本古典文学大系（岩波書店）

- ・『源氏物語』一～五 ・『平家物語』上下

日本古典全書（朝日新聞社）『狭衣物語』上下

『更級日記総索引 本文篇』（武蔵野書院）

『枕草子総索引 本文編』（右文書院）

『改訂新版かげろふ日記総索引 本文篇』（風間書房）

『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院）

『徒然草全注釈』上巻・下巻（角川書店）

『十訓抄 本文と索引』（笠間書院）

『慶長十年古活字本 沙石集総索引―影印篇―』（勉誠社）

参考文献

藍美喜子（1988）「源氏物語における「あはれ」の偏在」『国語語彙史の研究』9（和泉書院）

池田敬子（1996）「ゆゆしく大様なる人―覚一本『平家』重盛検証―」『国語国文』第65号第4号

大野晋（1966）『日本語の年輪』（新潮文庫）（初版は 1961 有紀書房）

陳崗・吉田則夫（2007）「心形容詞の歴史的な研究―「ねたし」について―」『岡山大学教育学部研究集録』第136号

中川正美・麻生恵子（2002）「狭衣大将の「ゆゆし」―「場」に容れられない魂の彷徨―」『梅花女子大学文学部紀要』第36号

<辞書類>

大野晋、佐竹明広、前田金五郎 編（1974）『岩波古語辞典』（岩波書店）

中田祝夫、和田利政、北原保雄 編（1983）『古語大辞典』（小学館）

中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義 編（1999）『角川古語大辞典』第五巻（角川書店）

新村出 編（2008）『広辞苑 第六版』（岩波書店）

西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫 編（2009）『岩波国語辞典』第七版（岩波書店）

飛田良文、浅田秀子（1998）『現代形容詞用法辞典』（東京堂出版）